

ります。これは反面から言うと天候の予報が信用出来ないからと言うことでもあります。その年の天候が正確に予報出来れば、それに従ったもっと積極的な品種の選定が出来るわけでありませぬ。

以上のことは主として不良気象の来襲期と言うことに重点をおいた見方ですが、作物は来襲前の気象の経過によりまして危険期も変動しますが、また作物体の素質が変わって来ますし、来襲後の気象の経過によりましてその後の生育、立ち直りが大きく影響されます。だから長期予報も単に不良気象についての予報ではなく作物生育全期にわたる正確な予報が必要なのであります。ここまで予報が出て始めて品種の選定だけでなく、施肥法とか田植の時期とかの一連の技術的対策が用意されることとなります。

所が予報に関連しましてもう一つ大切なことがあります。それは発表する時期の問題であります。品種の選定をするのでありますから、予報は播種前に発表されねばなりません。わずかの差で予報の精度が上がるのならば、今一步退いて田植前でもよいのです。苗はむだになっても各品種を作って置いて、予報に従って適当な品種を決定して田植をすると言う手は出来るからであります。おそくとも田植前には予報をしらなければなりません。肥料のやり方、一坪の株の数、植え方等も判断して計画的に準備できるからであります。一度植えた稲をぬくわけにはまいりませぬ。肥料が多すぎたからと言って後から取り出すことは出来ないからであります。

もちろん短期間になればそれだけ予報も正確になり具体性を増すのでありませぬから、その後の予報も時機をえてたびたび発表して行く必要がありますし、それに従って技術的対策を打って行くことが大切なこととは言ってもありません。

予報への注文が中心になりましたが、このような予報に対して打つべき農業技術の面からの対策は確立出来て

いるのか、と言いますと必ずしもそうではありません。大部分は対処できると思いますが、実際面ではまだまだ研究して行かねばならない問題が山積しているというのが実情でありませぬ。

こう言う意味で気象関係者と農業関係者の今後一層の協力が必要と思ふわけでありませぬ。

予報が災害防止に役立つための問題としては、以上の他に多数の点が検討されねばなりません。たとえば現地の農家の耕地と測候所の予報との関係、気象予報と作物被害との関係(相手の作物を対称とした被害予報の問題)応急対策の問題等しかもそれらは各災害別に研究されねばならないのであります。これらの点についてはここでは省略致します。

ただ最後に付言したいことがあります。冷害について従来は主にいわゆる気象予報であったわけでありませぬが、水田の特徴として冷水害の問題があり、この被害が冷害の中で占める比重は大きいと思われませぬので、水温予報と言ったような点への関心がもっと拂われてよいのではなからうかと考えませぬ。冷水被害の限界温度以下になる水田地帯が冷害年に非常に拡大されると考えられませぬので、一般気象予報に関連しましても、このような予報が必要なのであります。このような限界地帯は気象の変動に従って敏感に伸縮するのでありましてその予報は困難かもしれませぬが、このような地帯にこそ技術的效果が顕著に現われるのであります。

もっと一般的に言えばただ冷害だけの問題ではありませぬが、個々の農家の技術はその耕地の環境の下で行われるべきものでありますので、環境のはあくが出来ないで技術の改良もありえないのであります。ここに技術の普及問題があるように思われませぬ。

以上未整理の点も多く雑沓であります。気象と農業技術についての所感を記してみました。御批判をいただければ幸であります。(農業技術研究所)

### 気象台でも商羊を飼いなさい

孔子が齊の国に居た頃のことです。王様は景公と申しました。ある晩、かつてみたこともない不思議な鳥が御殿の庭にとんできたのです。なにしろ、その鳥は一本足で、からだにはいれずみをし、口が赤く、人のうそぶくような声をだしてなき、晝はねていて夜になるとびまわるといふたいへんなしろもの。さすがの王様もうす気味わるくなっているいろいろと臣下にきいてみたのですが一人としてこたえられる者がありません。そのとき一人の男がこう進言致しました。「先達ってから御殿に逗留している孔子は大変らしい学者だとの評判ですが一つおたずねなってみたらいかかです」。本当にらしい学者だと知ってそういったのか、それとも答えられなかったらそれを口実にこの国から追い出そうとしたのか、今となってはしらべるすべもございませぬ。ともかく王様

はこの者のいったことをおとりあげになり、人をやって孔子に問わせましたところ「ハイ、この鳥は商羊と言って、大水を知らせる鳥でございませぬ。私はずっと以前、子供が「商羊がとび上つたから大雨があるでしょう」と歌っているのをきいたことがあります。ですから、この国でもまもなく大雨がふり、水害がおこるでしょう」と答えられたのでした。果せるかな、しばらくして長雨がふりつづいて、洪水がおこり、諸国は大変な被害をうけたのですが、ただ、齊の国だけは孔子の言をきいて準備してありましたので、危いところを助かったということ。景公は成程聖人はちがったものだ、と感心したということですが、しかし、孔子をこの国にとどめておくことは遂にできなかつたことはよく御承知の通りです。(T.W.)